

アレッシオ・パタラノ

『シー・パワーとしての戦後日本』

——帝国の遺産と戦争の経験と海軍の建設』

*Alessio Patalano, Post-war Japan as a Sea Power: Imperial Legacy, Wartime Experience**and the Making of a Navy*

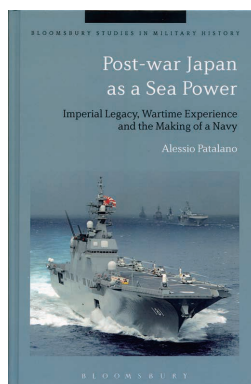
London: Bloomsbury Academic, 2015.

戸部良一

戦後日本の軍事組織である陸上自衛隊（陸自）、海上自衛隊（海自）、航空自衛隊（空自）は、それぞれ過去（戦前・戦中）との向き合い方が異なっている。まず、空自は、戦後、新たに独立した組織として誕生した。過去に前身となるべき組織を持っていない。単純に言えば「帝国空軍」なるものは存在しなかった。存在しないものは批判の対象とはならなかったし、そこから受け継ぐべき遺産や伝統もなかった。陸自の場合は、過去との向き合い方が微妙である。「帝国陸軍」は第一義的に批判の対象であり、陸自は「帝国陸軍」との断絶を志向しながら、その伝統や遺産のすべてを拒否することは難しかった。その意味で、陸自の「帝国陸軍」に対する態度はアンビヴァレントである。これに対して海自は、「帝

国海軍」の遺産と伝統を、おおむね肯定的に受け入れた。本書は、この海自の肯定的な過去との向き合い方の内実を紹介し、過去の遺産と伝統が海自の創設と発展にいかにかを解明している。

三自衛隊には、それぞれ相手と自らの体質を揶揄した「自虐的」な形容がある。空自は「勇猛果敢・支離滅裂」、陸自は「用意周到・頑迷固陋（動脈硬化）」、海自は「伝統墨守・唯我独尊」とされる。空自と陸自はともかく、海自の「伝統墨守」という体質は、「帝国海軍」の伝統との連続性を、よく言い表しているといえよう。「伝統墨守」という形容は、「帝国海軍」の伝統が戦後も海自に自然に受け継がれたということを意味しているのではない。それは、



海自が過去の遺産を意識的に（もちろん選択的にだが）受け継ぐとしたことを、はしなくも言い表していると考えられよう。

戦後、「軍事アレルギー」という言葉に象徴されているように、敗戦とその惨状の衝撃のために、特に原爆投下を含む空襲による非戦闘員の甚大な被害のために、日本人の間には軍事的なもの、軍隊的なものに対する拒否的な感情が広がった。戦争は、好戦的な軍部が引き起こしたものであるとされ、悲惨な敗戦の責任もすべて軍部に帰せられた。ただし、多くの場合、そうした好戦的な軍部の役回りを演じたのは野蛮で封建的と見なされた「帝国陸軍」であり、「帝国海軍」はむしろ近代的・合理的で、戦争回避に努力したにもかかわらず、無謀な陸軍に押し切られたのだ、という解釈とイメージが定着した。海自は、このイメージを巧みに利用したのである。

もちろん海自の「帝国海軍」イメージ利用も、過去の遺産と伝統をすべて肯定したわけではない。受け継ぐべき伝統とされたのは、太平洋戦争で敗北を重ねた海軍のそれではない。黄海の戦いや日本海海戦に象徴される、日清・日露戦争での勝利を決定づけた「栄光」の海軍の伝統が受け継がれたのである。帝国海軍は日本の近代化を牽引し、西洋の先端技術を模倣・摂取しながら、日本固有の「精神的」価値を失わず、ほとんどゼロから列国に伍する軍事組織へと成長した。海自は、この昭和期以前の海軍をモ

デルとし、その伝統を受け継ぐことによつて組織のアイデンティティを確立した、と著者は言う。

太平洋戦争期を含む昭和期の海軍は、大艦巨砲主義に取りつかれ、実際の戦争がどのような性質のものになるかを見通すことができなかった。海自はこれをきびしく批判したが、だからといって、戦前の海軍のすべてを否定しようとはしなかった。大艦巨砲主義に呪縛され変異をきたす前の海軍を、海自は健全な軍事組織として受け容れたのである。そして、帝国海軍が西洋の先端的技术や戦略・戦術を積極的に摂取した前例は、戦後の海自が米海軍から技術や戦術など多くを学び導入しなければならなかったときの、心理的な抵抗を小さくすることに役立った。

本書の特色は、このように戦後の海自の創設と成長が帝国海軍の伝統と遺産に負っていることを、明快かつ実証的に論じていることにある。上述したように、それは海自が自ら選び取った方策の結果であつた。たとえば著者は、海自が帝国海軍にまつわるパブリック・メモリーを利用しつつ、自己に有利な記憶の定着と拡散に努めたことを、ジャーナリストや知識人との交流に着目して考察している。代表的な例として挙げられているのは、ジャーナリストの伊藤正徳、小説家の阿川弘之と、その息子の阿川尚之である。

伊藤は、帝国海軍の欠陥を批判しながら、日本の近代化に果た

したその役割を評価し、日本海海戦勝利の歴史的意義を強調した。阿川弘之は、海軍という組織の人間的な側面を鋭く、しかし温かく描いた。尚之は、様々な執筆活動を通して海軍と海自をつなぐことに貢献した。伊藤や阿川父子の作品が「講談社文化」に属するというのは著者の誤解だろうが、こうし海軍・海自にシンパシーを有する知識人に着目し、海自が彼らの協力を得て、パブリック・メモリーの強化に努力した経緯を詳細に描写した点は、海自研究への本書の大きな貢献だろう。

海自はこうしたパブリック・メモリーを背景として、自己イメージを国民にアピールする。それは意識的なPRあるいは自己表現の戦略であつた。伝統的精神と近代的技術能力を兼ね備え、国際的視野、健全な愛国心、厳正な規律を有するという、人びとが帝国海軍軍人について抱いているイメージを、海自は自らのイメージに重ね合わせた。そのPR戦略の中心は、プロフェッショナルリズムを強くアピールし、国民から信頼をかち得ることであつた。冷戦時代が終わり、海自の活動範囲が拡張すると、人々の目にさらされる部分や現実的な批判を受ける余地が広がったが、それに応じて、海外派遣やPKOについて国民の理解と信頼を得るためのPR活動も積極的に展開された。著者は、観艦式や基地での様々な催し、博物館の設立・展示など、海自が実践したPRの実例を、イメージ戦略を担当した海上自衛官のアイデアと活動を

軸としながら詳しく紹介している。

海自が帝国海軍から受け継ごうとしたのは、伝統的価値と近代性を併せ持つことであり、国民・国家への忠誠心と、開放的で柔軟な心の持ち方や技術習得の熱意とを兼ね備えることであつた。それらを通じて、海自は自衛官の間に誇り（プライド）と組織への帰属意識、連帯感（エスプリ・ド・コ）を育んだ。そのために、専門職としての目的を教え、チームワークや船乗りとしてのシマンシップを身に付けさせようとした。著者は、こうした帝国海軍からの伝統継承を、海自の教育システムの分析によつて明らかにしている。防衛大学校や幹部候補生学校での教育、後者を卒業した後の遠洋航海での実践教育、良識派に属する帝国海軍軍人（たとえば山梨勝之進）による幹部学校での講話等が、海自の教育システムで重要な位置を占めた。

上述したように、もちろん海軍の伝統は無批判に継承されているわけではない。帝国海軍について特に批判されたのは、陸海軍間の協力の欠如であり、狭い組織利益の追求であつた。これを是正するために、たとえば防大では、民主体制（デモクラシー）の下での軍事組織のあり方や民主的価値を教えるだけでなく、三自衛隊統合の教育が行われてきた。

帝国海軍に対するもう一つの批判は、政策と戦略との関係に関わっている。帝国海軍は、物的戦力の数量不足を補うため、艦船

の速度、防禦力、砲力など質的な面での技術の優位に異常なほどこだわった。それゆえ、「なぜ」「何のために」そうした技術的優位と、それを成し遂げるための予算が必要なのか、部内で議論が交わされなくなっていた。予算を取るためには仮想敵国が必要であり、海軍部内の論議は、数的に優勢な仮想敵を圧倒し得る質的に優れた艦船のための技術的・戦術的議論に終始することになった。海自は、帝国海軍の遺産を受け継ぐにあたって、この点を厳しく批判し反省した。こうした反省の上に立って海自は、国家政策の手段として、海上自衛隊がいかなる役割を担うべきかを根底から考えるようになった、と著者は論じる。

本書の価値は、海自が海軍の伝統の良質な部分を継承し、自らのアイデンティティ確立のために活用したことを丁寧に描写したことにある。したがって、本書前半部のパブリック・メモリーやイメージ戦略を扱った部分が、特に印象的である。ただし、本書後半部の戦略やドクトリンを扱った部分は、やや迫力に欠けているように思われる。

というのも、戦略やドクトリンを、海軍からの伝統継承だけでは説明できないからである。むしろ本書もその部分を伝統継承だけから描いているわけではない。だが、著者は伝統継承を、戦略やドクトリンの形成や発展にとつての重要な要因の一つに位置づけようとしている。しかしながら、その伝統の内容は、多くの場

合、必ずしも日本帝国海軍に固有のものではなく、いわば海軍一般で重視されている普遍的なものである。

要するに、帝国海軍からの伝統継承という視点は、海自の歴史を語るときには有効だろうが、現在の海自の戦略やドクトリンを分析する場合には、限界がありそうである。さらに著者は、海自による帝国海軍の伝統継承にかなり肯定的、好意的であり、皮肉をこめて言えば、本書は海自のプロパガンダ戦略の一環かもしれないとさえ考えすぎてしまう。海自の伝統継承のあり方に本当に何の問題もなかったのか、その点についてのもっと突っ込んだ分析がほしかった。

近年、戦後の自衛隊史や防衛政策史に関して、史料の限界はありながらも、かなり研究が進展してきた。日本語による研究書・研究論文も豊富である。だが、どうしても使用言語に限界があり、その点では本書のように、英語による自衛隊史研究の刊行は時宜を得たものであると評価されよう。なお、一部に日本語の誤読のようなものが散見されるので、版を重ねたときにでも、訂正されることを期待したい。